

「レクラム文庫」に見るひとつのドイツ文化史

瀬戸 武彦

(人文学部人文学科欧米文化研究室)

〈Universal-Bibliothek Reclam〉 —Eine deutsche Kulturgeschichte—

Takehiko SETO

*European-American Studies, Department of Humanities
Faculty of Humanities and Economics*

1 「…吾人は範をかのレクラム文庫にとり…」

昭和2年(1927年)7月付の岩波文庫発刊に際しての「読書子に寄す」の一文は、「真理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む。」の冒頭の一節によっても、また中段の「…吾人は範をかのレクラム文庫にとり、…」の一節によっても世上よく知られている。岩波文庫発刊以前にもわが国にはいく種類かのいわゆる文庫本は存在したが、昭和2年刊行の岩波文庫はやがてその選書、名訳によってそれぞれの分野の学界、また読書界に寄与するところ大きい存在となっていた。その岩波文庫とレクラム文庫は前に掲げた、哲学者三木清草案と言われる⁽¹⁾一文に明示されているように、実に多くの類似点をもっている。ところで範とされたレクラム文庫、及び発行元であるレクラム社の歴史には、一出版社の歴史を超えたヨーロッパの、またドイツの歴史、文化を垣間見ることが出来る。本稿ではレクラム文庫誕生に至る過程とその発展を追いながらわが国とも関わりをもつことになる文化史的意義に触れてみたい。

2 宗教改革とレクラム家

レクラム文庫、正しくは「Universal-Bibliothek」、即ち「万有文庫」あるいは「世界文庫」とでも称されるべきものであるが、わが国では発行元であるレクラム社の名を冠しての「レクラム文庫」の名で知られているこの叢書は、今日のレクラム社を興しかつレクラム文庫を創始したアントーン・フィリップ・レークラム (Anton Philipp Reclam 1807-1896) に因んでいる。Reclamという姓から類推されるようにレクラム家は元来フランスに発し、レークラム (Reclam) もそもそはルクラン (Reclan) であった⁽²⁾。今日ドイツを代表する出版社とも言えるレクラム社が、実はフランスからの移住者に起源をもつことはわが国では余り知られてはいない。またその背景には宗教改革の大波があったことも意外な事実ではないだろうか。そこでアントーン・フィリップ・レークラム⁽³⁾が今日のレクラム社を興すまでに至ったレクラム家の歩みについて簡単に述べてみる。

ルクラン (Reclan) 家は16世紀前半にはまだ北フランスのサヴォワエ地方に住んでいたが、宗教改革が一家をフランスの地から追いやることとなった。スイスにもほど近い地域に住んでいたこともあって新教のユグノー徒となった一家は先ずはジュネーブに移住した。家長のジャン (Jean Reclan) がこの町の市民権を得たのは1532年のことである。以来、ジャン及び息子、孫達は自らを

ジュネーブ市民と称するようになった。一族の者達はある者は商人、あるいは牧師となり、また金細工師を職業としたが、祖先のフランス的伝統は固く守られ、姓のルクラン (Reclan) も、またフランス風の名も変わることはなかった。しかし18世紀に入ると一部の者達はダブリンを経てベルリンへと向かったのである。

アントーン・フィリップの曾祖父ジャンは生地ダブリンを離れるとまずはマグデブルクに腰を下ろし、1739年ベルリンで宝石店を開いた。その際にジャンは姓のルクラン (Reclan) をドイツ風にレクラム (Reclam) に変えたものと思われる。宝石商として名を成したジャンはフリードリヒ大王に認められるところとなり、息子のジャン・フランソワ (Jean François) は宮廷御用達の宝石商に重用された。ジャン・フランソワの末の息子シャルル・アンリ (Charles Henri) は書籍商の道を歩むことになるが、ここに初めてレクラム社発足の道筋が出来たことになる。シャルル・アンリは教育家にして青少年向きの著作を出していたヨアヒム・ハインリヒ・カンペの下、ブラウンシュヴァイクで学校教材の出版、販売の業を修業し、やがてその姪と結婚した。1802年、シャルル・アンリは当時ドイツ国内ではフランクフルトと二分する書籍出版、販売の中心都市ライプチヒにささやかな学術出版社を設立することができた。

シャルル・アンリの長男、のちにレクラム文庫の創設者となったアントーン・フィリップ——洗礼の際にはアントワヌ・フィリップ (Antoine Philippe) と名付けられたが、このアントーンがレクラム家としては最初に名前もドイツ風に変えた——も父親と同じく、ブラウンシュヴァイクのカンペの元で修業をするが、その頃には代変わりをしていてカンペの娘婿であるフィーヴェクがとりしきっていた。この叔父にあたるフィーヴェクの下でアントーンは書籍販売にとどまらず、古典作品の出版、さらには印刷、活字鑄造に至るまでを四年の修業期間にみっちりとは仕込まれた。これらの修業がのちにレクラム文庫発刊に大いに役立ったことはいうまでもない。そして既に一年後にはアントーンはライプチヒで一人立ちすることになった。

1828年4月1日、21才のアントーンは父から3,000ターラーの元手を貰うとともに父の出版社を引き継ぎ、更に貸出図書室と新聞、雑誌の閲覧室を備えて大きく模様がえをした。やがてアントーンのレクラム社はライプチヒの学者、文化人の溜り場ともなった。

1837年7月1日、アントーンは閲覧室、貸出図書室の部門を一切廃止して出版専門の書店として衣がえを行なう。その際にアントーンは出版社名に「二世」の意である「junior」をつけ加えた。それはレクラム社の正式社名「Philipp Reclam jun.」となって今日に至っているが、父親の興した会社と区別をつける意味だけではなく、父への恩に報いるためでもあったのである。

3 1867年11月10日に向けて

神聖ローマ帝国成立以降もドイツは900年近くにわたって、多くの王侯、司教等の治める分邦、領邦国家としての状態が続いていた。1806年ナポレオンによる神聖ローマ帝国解体によっても、こうした状態は大きくは変わらなかった。諸邦分立の状態は最大時の300余国から30余国と数こそ減少はしたものの、イギリス、フランスなど他のヨーロッパ諸国のような中央集権の統一国家に至ることはなかったのである。

ところで書籍出版に関して上記のイギリス、フランスやアメリカにおいては18世紀に入ると、著作権法が確立し始めた。しかしドイツ諸国においては統一的な法律もなく、いわゆる海賊版は公然と行なわれていた。こうした状況にあって19世紀になるとドイツにおいても書籍出版に関する諸邦間の協議が行われ、紆余曲折を経たのち1827年から1829年にかけて、当時のドイツで指導的立場にあったプロイセンと31のドイツ諸邦との間で文学作品の翻刻についての条約がとり決められた。その後

更にドイツ諸邦間での協議、とり決めがなされたのち1837年6月11日、プロイセンは「学術及び芸術作品の翻刻並びに複製に対する著作権者の庇護」という法律を公布した⁽⁴⁾。この法律の画期的なところは、著作権者の同意を得ることなしに翻刻することばかりではなく、絵画、彫刻の複製及び戯曲、音楽作品の上演、演奏にまで及んでいたことである。また著作権の保護期間は、作者の死後30年間と定めた。しかしプロイセンのこの先進的な法律もドイツ諸邦全土にすぐに適用されたわけではなかった。プロイセンを除く他のドイツ諸邦は1837年11月9日の決定で、著作権の保護期間を10年間としたにすぎなかったのである。つまり、1837年11月9日以前の20年間に、すなわち、1817年以降に出版された書籍は1847年まで30年有効としたものの、1837年以後に出版されたものは10年間しか著作権を認めなかったのである。

1845年に至ってやっとプロイセンが打ち出した著作権30年間庇護の法律は、当時の北ドイツ連邦の全ての国々に有効となり、更に1856年11月6日には、1837年以前に死亡した作家の著作権は30年間で消滅することが決定された。このことは非常に大きな意味をもっていた。従来、ゲーテ、シラー等の古典作家の著作権はコック書店といった特権的出版社などが半ば永続的に有していたのであった。それが1837年11月9日の30年後、つまり1867年11月9日をもって失効し、以後は誰れもが自由に古典作家の著作を出版することが可能になった。こうした状況から、1867年11月10日はドイツの出版社にとっては一大変革の日、記念碑的な日付となったのである。

アントーン・フィリップ・レクラムが1837年に貸出図書室、閲覧室部門を廃止したのも、30年後に訪れるであろう日を予測してのものであった。レクラム社ではこの1867年11月10日に向けての準備として、1858年に12巻本のシェークスピア戯曲全集を当時の相場の半額以下の価格で発売した。これらはいずれも既に他の出版社から過去20年の間に出版されていたもので、その版権を取得することによるものであった。12巻全て異なった訳者のものであることも異彩を放っていたが、なによりも低価格が売りものだったのである。それは版を重ねることで採算もとれる見通しの上で、事実、9年間で15版を重ねた。

1867年11月10日に向けての最終段階として、1865年には上記シェークスピア戯曲全集を25分冊にばらして、更に低廉価格で発売した。この25分冊シェークスピア全集にはいくつかの特色があった。一つには、従来書籍販売の常識であった予約販売制を廃し、任意の分冊一点でも購入を可能にしたことである。更に、低廉価格を打ち出すために装丁を極度に簡便にして、発行部数も各冊30,000部を一気に刷ったことである。これらの背景には、印刷機械の進歩や読者層の大衆化という現象が起り始めていたという事実もあったと思われるが、レクラム社にとっては来たるべき日に備えての着々とした歩みでもあったのである。赤味がかった黄色の色合いの装丁もやがて生まれるレクラム文庫を想わせるものであった。

4 レクラム文庫の誕生と発展

1867年11月10日、レクラム社はゲーテの『ファウスト』第Ⅰ部、第Ⅱ部を、Universal-Bibliothek、すなわち、レクラム文庫のシリーズ第1,2巻として、これを含めて都合35冊を一気に同時発売した。35冊の中には他にレッシング『賢者ナータン』、クライスト『ミヒャエル・コールハース』、シラー『群盗』及び『ヴィルヘルム・テル』、ホフマン『スキュデリー嬢』などの古典作品が収められ、しかも各冊は3,000から10,000部も刷られたのであった。『ファウスト』を例にとると、1867年11月10日以前にⅠ、Ⅱ部とも予め各5,000部が用意されていた。しかもこれは忽ちの内に売り切れとなり、12月にはそれぞれ5,000部が増刷され、さらに翌1868年の2月には各10,000部が増刷されるという具合であった。

このような目を見張るほどの売れゆきを見せた大きな理由は、すでに言及したシェークスピア戯曲全集での経験、つまり、簡便な装丁による低価格、そして予約することなしに任意の好みのものを手にすることができたことにあった。また、古典的名作を一切省略することなく、完全な型で呈示したことも評判を呼んだ。このことはやがてレクラム文庫の信頼性、評価と結びつくことにもなった。

赤味がかった黄色の色合いの装丁、それは確かに簡便ではあったが、のちのユーゲントシュティールを想起させる装飾は斬新にして洗練された印象を人々に与えた。またレクラム文庫は『ファウスト』第Ⅰ部をシリーズの番号1番としたのを始めとして、刊行するごとに通し番号を付し、読者をしてやがては古今の名作が続々と刊行されることを待ち望ませるようになった。しかもこの番号によって、あるいは番号と共に示されている星印によって価格を一目で判別できるという工夫もこらしたのであった。レクラム文庫刊行当初は比較的頁数の少ないものが選ばれ、一点につき番号も一つであったが、——『ファウスト』の場合はⅠ、Ⅱ部がそれぞれの番号を有している——のちに、例えばティークの『フランツ・シュテルンバルトの遍歴』は、8715-21の番号が付けられ、小さな星のマークが7つ脇に並んでいる。この星のマークひとつにつき2グロッシェン、つまり20ペニヒとされたのであった。

1878年、レクラム文庫刊行後11年目には通し番号は1,000番に達し、1896年には3,470番にも達した。こうしてレクラム文庫はドイツの読書界に定着し、レクラム社もドイツを代表する書肆といわれるまでになる。

5 インフレ時代と東西分裂

レクラム文庫の価格表示でもある星マーク、この星印ひとつにつき20ペニヒは1867年の発刊以来実に49年間、1917年まで維持された。仮りに当時物価が安定していたにせよ、これは驚異に値するといえよう。しかしこの星ひとつ20ペニヒという、人々に沁み着いた価格も第1次大戦後、ドイツに猛烈なインフレ時代が到来するとともに終わりを告げた。1917年に25ペニヒに値上げされるや、以後は天井知らずの上昇を続け、1922年には星ひとつにつき3,300億マルクという想像を絶する価格にまで至った。こうした異常な価格もレンテンマルクの登場で収束し、1924年には40ペニヒ、1932年には35ペニヒと再び往時に近い価格にまで戻った。

インフレ時代の困難をも乗り越えたレクラム文庫は1943年、発刊から76年を経て通し番号は7,600に達し、総発行部数は2億8千万部にも及んだ。なお、この通し番号7,600が7,600点の刊行を意味するものではないことは先に述べたように、一冊の本に付せられる番号は一つとは限らず、場合によっては一冊で7番も占めることはティークの作品で例をあげた通りである。しかし時にこれが誤って理解され、7,600番、つまり7,600点と受けとめられたりもしている。

レクラム社、そしてレクラム文庫にとっての最大の危機は、1943年空襲によって出版機能を破壊され、やがて戦争終結後、国が東西に分裂するとともにレクラム社自体も西と東に分かれてしまったことである。レクラム社の主要部は西のシュトゥットガルトに移されたが、レクラム社発祥の地ライプチヒにも一部が存在し続けるという二重構造が生じることになった。旧東ドイツのレクラム社もやがてレクラム文庫を刊行することになるが、統計的な資料は今日なお不明といってよいであろう。従って第二次大戦後のレクラム文庫を語る時は旧西独のシュトゥットガルトに本社を置いたレクラム社とならざるをえない。

1947年にシュトゥットガルトに移ったレクラム社は、一時的に社名から<Philipp>及び<jun.>がはずされたが、1958年からは再び旧名に戻り、1967年、つまりレクラム文庫発刊100年の年には

通し番号も2,100番、1,000点を超え、移転後20年で発刊部数も1億を上回った。発刊後100年間での売れゆきベスト・スリーはシラーの『ヴィルヘルム・テル』500万部、レッシング『賢者ナータン』及びゲーテ『ヘルマンとドロテア』各200万部とのことである⁽⁵⁾。ドイツにおけるレクラム文庫の占める位置を思うと、ここにドイツ人の、われわれ日本人とは違った傾向を見ることができるのではないだろうか。

戦後の発行部数は、特に70年代以降にはめざましいところがあり、通し番号は今日すでに1万を超え、1867年からの総発行部数は8億にも及んでいるようである⁽⁶⁾。また1990年の東西ドイツ統一は、二つに分かれたレクラム社をやがては統一させることであろう。

6 レクラム文庫と岩波文庫

本論冒頭で触れたように、岩波文庫はレクラム文庫に範を求めて発刊された。1978年に出された『レクラム社の150年』には、昭和2年に当たる1927年の項に次のような記述がある。

「日本において岩波文庫が発刊されたが、それは、内容、装丁、赤味がかった黄色の表紙、通し番号並びに小さな星印をつける等広範囲にわたってレクラム文庫を手本としている。ほどなくしてこの文庫は日本人にとって、ドイツ人にとってのレクラム文庫と同様の意味を獲得する。この文庫は日本文学、外国文学、哲学、自然科学、法律、政治に関する著作を収めて40年代には通し番号もすでに5,000番に及んでいる」⁽⁷⁾

レクラム文庫と岩波文庫の類似点、装丁、色合い、価格表示方法といった外観だけではなく、編集方針、内容に至るまでの類似性がこの記述には簡潔明瞭に示されている。岩波文庫の表紙の唐草模様は画家の平福百穂の手になるもので、正倉院御物の模様から図案化されたとのことであるが⁽⁸⁾、これもレクラム文庫発刊時の図柄を想起させるものである。

レクラム文庫の歴史をたどると、そもそもは宗教改革に発し、しかも当時少なからず存在したドイツ移住のユグノーの末裔がその創設者であったことはひとつのドイツ史とも言え、また、その後の変遷にはひとつのドイツ文化史が見られるとも言えそうである。そのレクラム文庫がわが国固有数の文庫を産み出すことによって日本文化にも大きく関わったのである。

注

- 1) 『岩波文庫総目録1927-1987』、岩波文庫編集部編（岩波書店、1987）Ⅱ頁。
- 2) «100 Jahre Universal Bibliothek 1867/1967» (Reclam, 1967) S. 5.
- 3) 本論中には、レクラムとレークラムの二通りの表記を用いたが、前者は通常呼びならわされているレクラム文庫、レクラム社、そしてレクラム家を表記する際に用い、後者レークラムは人名の場合に用いた。
- 4) Henze, Eberhard: «Kleine Geschichte des deutschen Buchwesens» (Buchhändler heute, 1983), S. 58.
- 5) E. ヨーハン/J. ユンカー（三輪晴啓・今村晋一郎訳）『ドイツ文化史1860-1960』（サイマル出版会、1975）23頁参照。
- 6) 戸叶勝也『ドイツ出版の社会史』（三修社、1992）173頁参照。
- 7) «150 Jahre Reclam -Daten, Bilder und Dokumente zur Verlagsgeschichte» (Philipp Reclam jun. Stuttgart, 1978) S. 140f.
- 8) 『岩波文庫総目録1927-1987』V頁。

なお、レクラム文庫及び岩波文庫の両文庫とも表紙、通し番号の付し方、価格表示に用いられた星マークという伝統的型式において今日は部分的に変更を加えている。前者レクラム文庫では表紙の色が黄色になり、星マークの代わりに正方形の型となり、後者岩波文庫では通し番号と価格表示の役を果たした

星マークが消滅している。

平成5年(1993)9月30日受理

平成5年(1993)12月27日発行